

放送人の会

No.58
2012.11.12

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階

TEL&fax03-3221-0019 Mail info@hosojin.com

代表幹事 今野 勉

編集担当 伊藤雅浩 (広報委員長・編集長)、鈴木典之、前川英樹 (HP担当)、松尾羊一 事務局 須斎恵美子

メディアは国益を超えられるか

～尖閣釣魚島、竹島独島問題を通して考える～

代表幹事

今野 勉

表記をテーマとして、シンポジウムが11月18日に開催されます。(概要左記)
放送人の会が主催者の一つです。前号の会報で触れたように、日韓、日中の間で国益にかかわる紛争が生じたとき、日韓中テレビ制作者フォーラムはどう対応すべきかという問題は、そう簡単には避けて通れないものです。といってそう簡単に何らかの行動ができるものでもありません。さまざまなルートでさまざまな意見を集めて、最終的に、北海道大学の東アジア研究センターの努力によって、表記のテーマで東京でシンポジウムを開催することになりました。私たち放送人の会と韓国PD連合会が参加します。今稿はそのお知らせにとどめます。

シンポジウム

「メディアは国益を超えられるか

～尖閣釣魚島、竹島独島問題を通して考える～

尖閣・魚釣島、竹島・独島の日本、中国、韓国の領有権の論拠の正当性や史実の解釈はひとまず置いて、メディアとメディアが強く影響力を発揮する世論という視点から、この問題を考える必要があると考えます。日本、中国、韓国のメディアは「領土」をどのように報じたのか？それによって民意はどのように動いたのか？2012年の紛争は、過去の同種の問題と異なるのか否か？現在の段階で精密な分析は難しいのですが、東アジアにおける領土をめぐる紛争の平和的解決を考える第一歩として、メディア・報道からこの問題を議論する場を以下のように作りました。ぜひご参加下さい(無料、事前申し込み不要)

日時 2012年11月18日(日)

午後1時10分～午後6時

(午後0時40分開場)

場所 慶応義塾大学 グローバルセキュ

リティー研究所 東館8階ホール

(東京都港区三田2・15・45 慶

應義塾大学三田キャンパス東門

そば)

最寄駅 都営地下鉄三田駅、JR田

町駅

主催 北海道大学大学院メディア・コミュニ

ニケ

ーシヨソ研究員付属東アジアメデ

イア

研究センター

慶応大学総合政策学部李千研究室

放送人の会

韓国PD聯合会

第1部

●報告(午後1時20分～2時50分)

韓国テレビ局制作者(予定)

毛峰香港亞洲週刊東京東京支局長

安江伸夫テレビ朝日報道部

●コメント

共同通信社編集局ニュースセンタ整

理部長(前外信部長) 渡辺陽介

第2部

●討論(午後3時～6時)

●問題提起

ハン・ドンソプ 韓国漢陽大学社会科学

部メディア・コミュニケーション学科

教授

●コメント

金平茂紀TBS「報道特集」キャスタ

ー(放送人の会幹事)

●討論

ハン・ドンソプ(前掲)

韓国テレビ局制作者(予定)

金平茂紀(前掲)

藤野彰北海道大学メディア・コミュニ

ケーション研究院教授

司会

渡邊浩平北海道大学大学院メデイ

ア・コミュニケーション研究院准教授

2012日韓中テレビ制作者フォーラム慶州大会・特集

一巡りの慶州大会 長沼士朗

今年の日韓中テレビ制作者フォーラムは第12回を迎え、10月の11日から14日まで韓国の慶州市で行われた。

釜山空港から慶州へ向かうバスの車窓からは、黄金色に実った稲の田圃が広がり、今まさに秋もたけなわという感じであったが、慶州市は古代朝鮮の新羅の国都であり、日本で云えば奈良、京都のような歴史遺跡の多い、人口28万人ほどの古都である。

この街の西の郊外の小高い丘の上につくられた慶州ドリームセンターが会場になり、ここに3国からテレビ関係者140人ほどが集まる盛大なフォーラムとなった。日本からは参加番組の制作者、放送人の会の会員、北海道大学のメディア研究者など40名、中国からは22名、地元の韓国からは74名の放送関係者が参加した。

このうち中国の参加者が当初の予定の半数ほどになり、代表者も予定の人物が変わっていたことなどが、多少最近の国際情勢の影響を受けているようにも感じられたが、それ以外は特に違和感もなく、例年通り友好的な雰囲気の中で3国の交流が行われた。

フォーラムは、11日午後6時からの

開会式で始まり、ここでは開催国の責任者韓国PD連合会の李廷植会長が、

「12回目を迎えたフォーラムが、大きな飛躍の契機になることを期待する」と挨拶、慶州市長の崔良植さんが、「2千年の古都慶州で、3国のテレビ制作者の交流が行われることを心から歓迎する」と歓迎の辞を述べた。

今年のフォーラムのテーマは、開催地に因んで「歴史の中の人間」、「歴史の中の想像力」とされたが、各国からは、テーマ作品1本、ドラマ、ドキュメンタリー、エンターテインメントの各作品1本ずつが参加し、日本からもテーマ作品として「日本人は何を考えてきたのか」田中正造と南方熊楠、「ドラマ」鈴木先生、「ドキュメンタリー」津波列島「忘れ去られた教訓」、エンターテインメント「ほこ×たて」鉄球と壁の対決」の4本が出品された。

作品の鑑賞については、これまでは、参加者が全作品を視聴するコンクール方式がとられてきたが、今回は、限られた時間に参加者の討論・話し合いの時間を少しでも長くとるため、ジャンル別に上映する3つの部屋を設け、同じ時間にドラマ、ドキュメンタリー、エンターテインメントの3作品が上映され、コンクールはとりやめになった。

この方式では、参加者が全作品を見れ

ないという不満が残るが、確かに作品を見終わった後の話し合いに、これまで以上に長い時間を割くことができ、ある意味では、制作者の交流を第一目的とするフォーラムの主旨に合致しているようにも思われた。

そんな中、今回のフォーラムでいちばん強く心に残ったのは、大会のテーマである「歴史の中の人間」に関連して行われたシンポジウムであった。

パネリストは、日本からNHKの塩田純プロデューサー、韓国からKBSの張永株プロデューサー、中国からは中国芸術研究院の吴江研究員が登壇。塩田プロデューサーから、かつて日本と朝鮮に関する歴史番組を日韓双方の視点から描きたいとKBSに共同制作の提案をした事例が紹介され、この発言がきっかけになり話し合いは3国の歴史問題に及んだ。

その中でKBSの張プロデューサーは、今日のように国家間の対立が表面化しているときには民族的アイデンティティを強調するような視点を避け、民の立場から歴史を見る視点が大切になるのではないかと発言。このあとの討論では中国の呉研究員も含めて、これからは国家の歴史を乗り越えるための共通の教科書づくりなど、新しい価値観を見出していくような取組みがもつとなさ

れるべきだという意見などが出された。

中国には物事は12でひと巡りするところがある。第1回のフォーラムではフェリー船上で日韓の歴史認識の問題が話合われたと聞いているが、ちょうどひと巡りした12回目の今回、再びこのように3国の歴史問題が話題に上ったということは、しつかり心に留めておきたいと思った。

なお番組交流と共に、古都慶州らしく、朝5時半に起きて石窟寺院に登り朝の日の出を拝んだり、世界遺産の仏国寺や古墳公園の天馬塚などを見学できたのも、第1回のフォーラムでは韓国国内では開催できず、日韓両国の間をとって釜山―博多のフェリー船で開催したが、そのことが今回のフォーラムの忘れられない思い出になるだろう。

最終日の閉幕式では、参加作品全部に「日韓中プロデューサー賞」のトロフィーが贈られ、3国から選ばれた審査員による作品の講評が行われた。

そして最後に、次回開催国の中国の代表趙平英さんから、「来年も日本や韓国から多くの人が中国へきてくれることをお待ちしています」という挨拶があり、今回のフォーラムは無事終了した。

充実した内容の運営にあたられた韓国PD連合会の皆さんには、心から謝意を表します。

新体制での韓国大会

山田 尚

これまで、このフォーラムで常にその真ん中にいた人が、今回いなかった。昨年の札幌大会の閉会式、その人から爆弾発言があった。

今回限りで自分は身を引く。

突然の言葉に会場は凍りついたように静まった。

鄭秀雄氏。このフォーラムを立ち上げ、以降も常任委員長として日韓中3か国を繋ぎ、まとめ、10回を超える大会に成長させ、彼なくしてはこのフォーラムが考えられなかった人物である。

そのような事態から、このフォーラムを維持・継続することが、これまでの鄭秀雄氏の功績に報いることでありフォーラムの意義でもある、との認識を改めて3か国で確認したところから今大会の準備がスタートした。

今回は、ご存じのとおり、厳しい環境の下での開催であった。今年末に向け、韓国では大統領選挙、中国もトップが代わる。政治が不安定になり、何かと影響も出てくる時期である。

そこに、中・韓と日本との領土問題。中国からの参加者は予定よりも減っていた。団長役ともいえる電視芸術家協会の、副主席や秘書長といった幹部の姿はなかった。これまでになかったことである。また、今回のテーマ、「歴史」に関する作品の制作者の姿も見えなかった。

が、参加していた中国の皆さんは、こ

れまでと変わらない様子であった。これは勝手な推測だが、ある面、参加者の気が少々楽であったかもしれない。

今大会は自分たちだけで全てを仕切ることとなった主催の韓国PD連合会からは、大会の成功へ向けての真剣な思いが我々にも伝わってきた。度重なる事前の連絡にも、我々の手違いや注文にも真摯に対応してくれた。私は今回、終盤だけの参加で報告を聞いただけだが、大会のメインである歴史番組のシンポジウムが成果を得られたというのも、彼らの尽力であろう。当初様々な配慮からどのように語られるのかと思われたものを、塩田Pから出た日本側の提案を受け、一歩踏み込んだものになったのは、彼らの力であり、実はそのような展開を望む気持ちがあったのではとも思える。

韓国PD連合会の李会長は、大会終了後、「大過なく終えられた。中国からの参加者が減少したことだけが残念だったが」と、言葉を選んで話してくれた。いい緊張感から始まったであろう今回のフォーラムでは、3か国の繋がりを大切にしていきたいとの思いが改めて確認されたとともに、シンポジウム等を通じて新しい姿への兆しも見えたようだ。韓国の運営された皆様、参加、協力して頂いた各国の皆様には感謝致します。

ところで、鄭秀雄氏は、目下、本業のドキュメンタリストとして、日韓中の共同制作や長年のテーマ作品制作に取り組んでおられるようですが、昨今の経済社会情勢から奮闘中とのことだ。

共通理解のための地ならしを

池田正之

フォーラムには昨年に続いて二度目の参加である。40年余り前、まさに田舎だった慶州を一人訪ね、仏国寺や石窟庵を歩いた。懐かしい土地への再訪でもあった。

セミナー「テレビは歴史をどう扱っているか」は、共通理解を促進するためのメディアの役割を再確認するものであった。韓国歴史学者による「坂の上の雲」への批判、「日本と朝鮮半島2000年」の共同制作をKBSが断った理由など、加害者と被害者の認識の差が示されたが、NHK塩田CPが誠実に応答していた。民の歴史や交流史を軸としたドラマやドキュメンタリーの共同制作に話及び、中国関係者が「難しい時期に共同で作ることは良いこと」と述べたのが印象に残った。

将来の共同制作を頭に出品ドキュメンタリーを見ると気になることもあった。一つは、地図表記である。地図がない、あっても全国図ではなく一部地域をスパーしているのは、外国人にはわかりにくい。こうした地図は、キチンと静止画で全国図の中の位置を示すべきだろう(領土問題係争地の処理をどうするか、これも話し合いでスタンダードを作るしかない)

もう一点は、カメラワークの自由度の問題である。「舌先の中国」は料理のプロモーション番組としては楽しい作品だが、キムチのつぼの底から見上げたり、

海苔の養殖場の長さ12メートルの竹の先端にカメラをつけて俯瞰したりと、作りすぎの感が残った。

昨年度のイ族のドキュメンタリーでは再現映像が断りなくあちこちに使用されていたが、共同制作に向けて「ドキュメンタリーとは何か」の議論も必要である。

熱い話

井上佳子

今回フォーラムに参加させていただき本当にありがとうございます。歴史認識がクローズアップされることになりましたが、期間中印象に残ったエピソードを記したいと思います。一日の日程を終え、場所を移して韓国の制作者の人たちと懇談していたときのこと。つくりたい番組の話から、あるべきメディアのあり方へ、そして、私たち現場の制作者はお互い理解し合えるよう努力を重ねていこうという話につながっていました。

「もっと熱い話をしたいですね」

その場にいた韓国人のディレクターに言いました。私としてはもっと理想を語り合いたいという思いでした。しかし言葉の壁があつてニュアンスが変わって伝わってしまったようでした。「熱い話」が「議論をしたい」という風に受け取られてしまったのかもしれない。この言葉は、彼のうちの歴史認識や竹島(独島)問題を喚起したようでした。

「戦争をしようか」

突然彼が私に言いました。それまでと同じ穏やかな表情で、彼は確かにそう言ったのです。私は凍りつくような思いがしました。黙っていると彼は再び同じ言葉を繰り返しました。

「戦争はしません」

私も笑顔でそう返すのが精一杯でした。短い時間とはいえ、制作者として同じ番組を観、討論するという大切な時間を共有したはずでした。そして国と国との間の壁を越えようと話をしたはずでした。私たちは同じスタートラインに立っていない。今さらながらそのことを強く実感した4日間でした。何とか壁を越えたい。私にとつて今後の大きな目標を持つことのできたとても大切な機会となりました。(熊本放送 テレビ制作部 ディレクター)

プロ意識と理性

隈部紀生

今回の慶州大会は、直前に日本と韓国、中国の間で国境問題についてやや激しい展開があったため心配する声があった。

ましてテーマが「歴史の中の人間、歴史の中の想像力」であっただけに、ほとんどの歴史認識とは別といても、どこで各国の「国民感情」が噴出すか多少気になった。

いざ始めてみると、テーマについての番組は、古代の国際交流を追い、近代の環境破壊に立ち向かった思想家を追

い、それぞれ理性的に問題を提示している。た。

「テレビは歴史をどう取り扱っているか」の討議でも、「各民族史より交流史、東アジア史を教育の重点にするべきだ」「自然と共存する考えは、もともと日韓中にあった。新しい共通の価値観を世界に発信できるのではないか」という発言があった。

国境問題で噴出したナショナリズムイックな「国民感情」に対して、プロ意識からまたは事前の話し合いで一線を画して、理性的に対応していた。

しかし日本から「日本と朝鮮半島の二千年」という番組の共同制作を持ちかけられたとき、韓国側は「韓日強制併合」といわなければならないと断り、「日本は被害者意識を念頭に置くべきだ」と言ったという。

言葉で一衣帯水の間柄というのは易いが、グローバル化した世界の中で、絶えず努力して相互理解を深めながら共存の道を探って行かなければならない。そのためにこそ、日韓中テレビ制作者フォーラムを継続して行くことが重要だ。*****

心を捉えた言葉

河野尚行

日・韓・中テレビ制作者フォーラム慶州大会の席上、メモした言葉の中から、韓国側、中国側の印象に残った発言を、時系列的にあげてみます。てにをはの細部は正確でないかも知れません。

▼フォーラムのスポンサーになった慶

州市長の冒頭挨拶です。

「慶州は、新羅の古都であり、魅力的な文化遺産で溢れている。しかし最も重要な文化遺産は人間である。韓・日・中テレビ制作者同士が、お互いに話し合うフォーラムが、ここ慶州で開かれる意義は大きい。成功を祈る」。

▼韓国の若き大会責任者の言葉です。「違いを通してお互いの異なる視点の価値が分かり、共通の情緒や観点を発見して感動する」。

▼2日目・シンポジウムでの北京芸術研究院研究員の発言です。

「総ての歴史は、現在の人々が目的に合わせて造り直すことが出来る」。エッ！

▼シンポジウムでの韓国KBS歴史番組プロデューサーの発言です。

「テレビは、大衆が持つ歴史感から影響を受ける。アメリカ在住の韓人社会が、最も激しく(韓国の)テレビにアイデンティティの供給を求める」。

「相手に歪曲した材料を提供し、相手との関係を悪くする事も出来る」。

「そろそろ、民衆が求める国民のアイデンティティから脱出すべきだ。テレビは、それぞれの国のアイデンティティ供給者の役割から脱却すべきだ」。

「大衆歴史教育の失敗もある。各民族」との(対立の)歴史より、もっと大きなワクでの歴史教育も必要である」。

この時期、韓国の番組制作者から、メディアがナショナリズムを煽るような事は慎もうという、これほど明確なメッセージが飛び出すとは想像していませんでした。

▼誰の明確ではないが「放送の民族的ショービジネス」という表現もありました。

▼日本から参加の作品に対して会場からの韓国制作者の発言。

「百年前も前に、田中正造は鉱毒の汚染で立ち上がり、南方熊楠は生態系維持を訴えている。いま韓国では、4大河川の汚染問題が発生しているが、この番組には感動した」。

私は不勉強にも、4大河川の汚染問題について詳細は知りませんでした。が、韓国の現政権の下では、メディアが汚染の実態をつまびらかにする事が難しい、とのこと。

今度のフォーラムに参加した渡辺浩平北大教授が領土問題に絡む最近の中国メディアの動向を「反日」となるとメディアはその矛を収められなくなる」と、10月の「Journalism」で詳しく分析しています。

こうした中国の動きを射程に入れた上で、韓国の放送人の中には、前記のような発言を韓国内のフォーラムで堂々と発言する人間も出始めました。

だからというわけではありませんが、日・韓・中テレビ制作者フォーラムの、この三角形が重要な意味を持つのです。一対一の対面方式と違ったのりしろが生まれ、相手との間合いが計れます。

歴史感覚の欠如と外交下手な日本にとつても、個性的なフォーラムであるといえましよう。

▼3日目、ドキュメンタリー会場で、「南

極の涙」を制作した韓国MBS制作者の発言です。

「南極の自然界の生態や汚染問題については、自由に取材、発表できるのに、我々が生活する国の河川汚染問題ではその自由さが無い。われながら不甲斐なさを感じる」。隣国の事について、無関心ではいられません。

竹島、尖閣諸島に端を発した紛争は当分収まる気配はありません。だが、

▼第12回日・韓・中テレビ制作者フォーラム慶州大会の最後に登場した中国代表者の挨拶です。

「来年の第13回の大会は9月下旬中国で予定しています。今回の韓国大会以上の大勢の方が、日本からも韓国からも参加されることを期待しています」。

パネリストとして

塩田 純

日中、日韓で領土をめぐる緊張が高まるなか、シンポジウムのテーマが「テレビは歴史をどう扱っているか」。どうなることかと心配であった。しかも登壇してみると、中韓のパネリストは予定のメンバーとは交代している。しかし、「案ずるより産むが易し」。刺激的な討論になった。

まず、歴史評論家のイ・トクイル（李徳一）さんが古代史を例に東アジア世界の共通性を指摘。これを受けて、私はかつて取り組んだシリーズ「日本と朝鮮半島2000年」を説明し、日韓が同じテ

ーブルについて歴史を話し合った試みを紹介した。韓国KBSのチャン・プロデューサーは「国民というアイデンティティにとらわれない歴史認識」という提案を行い、私も「国境を越えた共通の歴史認識づくりをメディアで」と応えた。

しかし、韓国側からは、「日本はまず強制占領（韓国併合）の反省が必要」という指摘もあり、近現代史を話し合う際避けては通れない、加害者と被害者という立場の違いが浮き彫りになった。この問題にどう答えるか、日本側の姿勢が問われることを改めて認識させられた。

会場からも次々に質問が投げかけられ、「これまで一番刺激的な話し合いだった。来年以降もこのテーマで議論したい」という声もあり、次につながる手応えを感じた。

できれば、夜の宴席でも日韓の話し合いが続けられるような場が欲しいと思った。

「歴史と人間」 体感

鈴木典之

昔（数えたら35年前にもなるのだが）日経新聞の連載小説で立原正秋の『春の鐘』を読み、主人公が女連れで慶州を旅するシーンが強く印象に残っていて、今回のフォーラムへの小生の期待には、古都慶州の地を自分の足で踏んでみることもあった。飛鳥・奈良・京都をひと混ぜにしたような旧跡・名所を予習し、にわか仕込みで朝鮮の王朝史や日韓交

流史も頭に入れた。無論、秀吉の文禄・慶長の役や近代の日韓併合も含まれる。

だから、きつい会議日程の間を工夫して、早朝・夜間に及ぶ懇切な観光タイムを設けてくれた韓国側の配慮が、ひときわ嬉しく思われた。世界文化遺産指定の仏国寺、石窟庵から大陵苑、雁鴨池、ミレニアムパークまで、見学・散策の一つ一つに、頭の中で繁栄と破壊の史実や人物が立ち上がり、躍動する。貞洞劇場で観た音楽舞踏劇「ミソ（美笑）II」は、新羅王朝初の女王・善徳の恋物語だが、華麗でダイナミックな完璧のステージは全て地元慶州独自の力を結集して創造したもので、これにはしびれた。

今回の会議の主テーマは「歴史と人間」で、会議の討論も予期以上に充実していたので、小生はそのテーマを全身で体感できた気分である。

慶州大会を終えて

田村優介

この度は、日中韓テレビ制作者フォーラムにご招待頂き、誠にありがとうございました。

他国のテレビ制作者の方と真剣に番組作りについて議論する場合は、私にとってもとても貴重で、刺激的でした。「同じバラエティ番組でも、その演出や企画に、その国それぞれの文化や国民性がこんなにも反映されるものか」と新鮮な驚きがありました。テレビメディアは、その国それぞれの

発展進化を続け、今に至っていることを痛感しました。と同時に、全ての国の人に受け入れられる番組コンテンツを制作することは、非常に困難な作業だという現実を突きつけられた気がします。

私がディレクターを務めている「ほこ×たて」という番組は、番組フォーマットを韓国のケーブルテレビ局に販売しましたが、視聴者に定着する前に、番組が終了を迎えたと聞きました。こうしたことから、番組フォーマットを販売するだけでなく、その国の視聴者に合致した形に柔軟に変えて行くことも重要ではないかと思えます。

「クイズミリオネア」や「料理の鉄人」のような世界中で人気が出る番組を日本、中国、韓国のテレビ局が共同で企画制作できる環境が近い将来に整う事を期待しています。この日韓中テレビ制作者フォーラムが、そういった環境作りのきっかけになって行かなければいけないのだと思います。

このフォーラムを通してでなければ出会うことのないテレビ制作の最前線で活躍している制作者と交流をもてたことは、私にとつてかけがえの無い財産となりました。

また、慶州のすばらしい街並や歴史遺産を楽しめたことも、フォーラムの良き思い出となりました。

このフォーラムにお声が掛かる様な新しい番組を作れるよう精進して行きたいと思えます。（フジテレビ・編成制作局バラエティ制作センター・「ほこ×たて」ディレクター）

韓国との交流

初田典子

初めて行った慶州はこんもりとしたかわいらしい古墳が街のど真ん中にあるような古都であり、ソウルとは趣がまったく異なる街でした。出発前、領土問題で緊張が走る国に行つて大丈夫なのか、と心配されたのですが、フォーラムのスタッフの皆様もそして街の方々も緊張関係などまるでなかったかのよう

に暖かく接して頂く中でフォーラムが行われました。フォーラムでは、大変大きな刺激を受けました。CS放送という限られた放送で、歴史に興味がある視聴者向け番組制作をしていましたが、今回のフォーラムでは日本に限らず多くの人に見てもらったほうがいいのではないかと、という意見もいただき、限られた視聴者、しか想定してこなかったこれまでの姿勢を反省し、かつ、専門チャンネルだからこそできることがあるのではないかと、思いを新たにいたしました。

歴史というテーマで、共同制作の番組をぜひ作って行きたいが、という話題が上りましたが、歴史専門チャンネルのヒストリーチャンネルだからこそ何か方法があるのではないか、ということを考えております。

夜には韓国のプロデューサー陣と話をする機会にも恵まれ、想像以上に日本語ができるPDが多かった事は驚きであり、また彼らの語学力に助けられ、貴

重な話しも聞くことができたことは、大きな収穫でした。

フォーラムに参加させて頂き、貴重な機会を与えて頂きましたこと、心より感謝いたしております。ありがとうございます。(東北新社)

生れて初めての韓国行き

藤久ミネ

空港から高速バスで、高層ビルの林立する釜山の街を抜けると、木立の間に畑や色づいた稲田、コスモスやスキも見えた。子どものころの日本や郊外の風景にそっくりだ。なつかしい国―それが第一印象だった。

新羅の古都、慶州の宿は赤松や桜の木立に囲まれ、豊かな芝生の中に立つモダンで清潔なホテルだった。フロントのお兄さんの顔立ちには、単一民族を誇ってきたわが日本人とまったく変わらなかった。だが、「公議室はどこ？」とたずねるとにこやかに「英語で言ってくれ」との答えが返ってきた。日本語を通じない―それは喜ばしいことではないか。韓国人の誇りを感じた。

開会式までの時間にタクシーを飛ばした国立慶州博物館は入場無料。国宝の鐘や収蔵品もさることながら、先生に引率されて見学する大勢の小学生に出会えた。はしやぎながらも騒々しくなく、素直で何とも可愛い。ふと、茨木のり子さんが韓国の子どもは「はじけ豆のよう

に元気がいい」と書かれたことを思い出していた。

フォーラムでは、芸能の分科会に参加。韓国の出品作「ヒーリング・キャンプ」に心搏たれた。在日三世の韓国人で、名古屋唯一の朝鮮人学校に通い、北朝鮮のサッカーチームに所属、ワールドカップにも出場したチョン・テセ選手のインタビュー番組だ。日・韓・北朝鮮の関係が集約されて見える辛口でおいしい番組だった。テセ選手は祖母の代に日本にきたと語ったが、わが祖先もはるか昔、半島から海を渡つて新潟へ来たのではなかったか。父祖の地に触れたと思える旅だった。

初めての韓国だった

堀川とんこう

韓国は僕にとって気軽に観光旅行に行けない数居の高い国だったので、ちょっとした決意をして参加した。

それで少しは韓国に触れたかという、残念ながら「千葉の幕張に行ってきた」という感じだ。フォーラムの会場はコンベンションホールとホテルだけが立ち並ぶ広大な新開地の、人影もまばらという場所で、町までは相当な距離のようだった。観光スポットの古寺や古墳はさすがに幕張ではないが、大型バスの駆け足見物になったのは残念だった。主催者が工面する膨大な費用を考えると、ぜ

い沢はいえないのだが、なんだか勿体ないスケジュールの感じがする。

両国がしきりに視聴率をいうのが印象的で、プロデューサーたちがそれに悩まされ始めている様子が見て取れた。韓流ドラマとK-POPなどの文化輸出が国策となった韓国と当局の審査が行われる中国とは事情が違つたろうが、出品されたわずかに二つのドラマを見た限りの印象では、ドラマをダメにするのは企画の審査・検閲よりも視聴率競争の方だと思つた。中国のドラマは、貧しい一家の娘が大学を目指すことになり、甥っ子のわずかな貯金を崩して地区委員に贈り物をしようとする様子が描かれる。家族の心情がきめ細かく描かれて飽かせず、いい質感だった。一方の韓国の歴史ドラマ、ハングルを作った王の話だというのが、父王の時代の残酷な殺陣ばかりが目立って、視聴率狙いが透けて見えた。中国ドラマは次第に国際化し、韓流はじきに行き詰まるなど思いながら見た。

この時期

前川英樹

東アジア状況が混沌としていくなかで、開催でどうなるのかと多少の緊張感もあつたが、なんであれ「この時期」だからこそ参加してみようと思つた。そして行つてみてよかった。

主催者(韓国PD連合)は相当ナーバスだっただろうが、大会運営の基本はしっかりしたものだった。ホテルは日本の

一室を恒例？のバーにしていたのだが、そこにも韓国スタッフはやって来た。中国チームにはバーはあったのだろうか？そして韓国のスタッフは訪れたのだろうか？中国のメンバーと会話する機会はほとんどなかったのが残念だった。最終日に「日本には経験と知恵がある。中国には発展する力がある。韓国には橋を架ける役目がある。それを果たしたい。」と韓国のメンバーが発言していたが、主催者の微妙な立場を象徴した言葉だろう。同時に「韓国は『強制併合』の被害者だというのが国民の理解」ということも、議論の中で明確に指摘していた。

日本側総括で河野尚之氏は「韓国、中国からさらに鋭い問題を出して頂きたい。我々はきちんとそれに答えたい。」としっかり受け止めていた。この一言が日本から発せられたことだけでも、この大会の意味はあったと思う。「文化を政治の風下に立たせてはならない」ということに、改めて思い至った4日間だった。（詳細レポートは、「放送人の会」ホームページ、放送人ブログ・スペシャルを参照して頂きたい。）

慰安婦のための歴史館

村上雅通

フォーラムの前日、釜山在住の金文淑さん（81）を訪ねた。金さんは「軍隊慰安婦」の調査・支援を長年続けてきた女性の文筆家だ。今でも、市街地のビル

の1フロアを借りて、慰安婦に関する写真や文書、元慰安婦が描いた絵画を展示する「日本軍慰安婦のための民族と女性の歴史館」を私費で運営している。

金さんと出会ったのは、私が慰安婦の取材に没頭していた21年前。当時、慰安婦問題は日韓最大の懸案事項でもあったが、当時の金さんは、日本に対する恨みより、韓国国内の「慰安婦」に対する偏見・差別を声高に訴えた。その状況は今でも変わらない。韓国の行政、一般市民が、あまりにも無関心だと金さんは嘆いた。

ということであれば、ニュースに登場する「ソウル日本大使館前の少女像とデモ隊の叫び」「韓国政府の強硬姿勢」はいったい何なのだろう。

金さんの歴史館には慰安婦だけではなく、抗日運動に加わった女性義士、独島の写真も展示されていた。丁寧な日本語で語りかける金さんが、話題が歴史になると表情は険しく、語気は強まる。その時、20年来の友人である金さんとの「壁」を実感する。

フォーラムでは、韓国の制作者が「東アジア共通の価値観を見出し世界に発信していく。」と発言した。これまで避けてきた「歴史」に踏み込んだ慶州大会は、フォーラムに新たな道筋を作った。しかし、制作者の中に、決して越えることの出来ない壁も改めて実感した。「潤滑油になろう」との目標を掲げ始まったフォーラム。12回目にしようやく、目標への第一歩を踏み出した感じがする。（長崎県立大学）

白髪長老と若者たち

渡辺紘史

3国のこうした時期に行われた、シンポジウム「テレビは歴史をどう扱っているか」は予想以上の結果となった。内容は他の報告に任せ、繰り返さないが、この成功は、前夜、歓迎会場の片隅で延々行われた司会者の韓国PD連合チャン・ヘランさんと日本側参加者塩田純さんの若い二人の、熱を帯びた議論と打ち合わせの結果である。

運営、会議内容両面における今大会の成功は、主催者韓国PD連合とスタッフたちの若い力によるものだ、私は思っている。

最終日、主催者韓国を代表して演壇に上がった韓国放送人会のイー・ユンファン氏（今回韓国放送人会の参加者はイーさんだけで、韓国参加者はほとんど現役PDたちであった）は、白髪長老的知恵の持ち主日本と、躍動する中国を、韓国が橋渡し、調整して今回の大会をまとめ上げた、後輩たちを褒めた。「白髪長老的知恵」とは言い得て妙。日本組はお互いの白髪禿頭を見回すばかりであった。

そういえば、今年会場には、これまで常連であった韓国放送人会のチャン（章）さんやチェ（雀）さん、中国のTV芸術協会の黎鳴さんや王占海さんの姿はなかった。（前週、晋州で行われた国際テレビ映像祭では、チャンさんやチェさん、そして王さんにはお会いしたのだが！）

中国も、政権交代や今回の政情の所為か不明だが、韓国同様若い代表団であった。若い二つの国に挟まれた日本も、作品制作者の発言と行動には若さと勢いがあり、頼もしく感じた。今回、宿舍の違う日韓の若者たちは、2夜続けて、近くの飲み屋やホテルの部屋で、車座になって飲み、かつ議論しあったようである。30代のNHKの田中君、渡辺君、東北新社の伴野君、初田さん等が、韓国の若者と何をどう話し合ったのかは詳らかではないが、第1回の日韓フェリー船上の日韓歴史認識をめぐる激論と違って、シンポジウム同様、和気あいあいとし、かし論点を外さず話し合ったに違いない。日本の白髪老人の一人として、そのことに大きな希望を持つと同時に、次回以降、日本の役割が、白髪長老的知恵の発揮でいいのだろうか、放送人会の若返りと関連して、考え込んでしまった。いずれにしろ、今回のフォーラムは、新しいフォーラムのスタートになるに違いない。

名作の舞台表 第33回

なぜ君は絶望と闘えたのか

WOWOW・2010年9月放送

日時・11月23日（金・祝） 1時半〜

場所・横浜・情文ホール

ゲスト・眞島秀和（出演）、門田隆将

（原作）、石橋冠（演出）、岡野真紀

子（制作）

司会・渡辺紘史

いろはに時代劇とその参り

菅野高至

言葉を失ったプロデューサーを前にして、脚本家がどれほど困惑したかを正確に記したいと、竹山さんのエッセイ「ドラマ制作秘話」(オール讀物07年12月号)を久しぶりに紐解くと、

「鬼は髪の毛をいじったり、ポカーンと口を開けて宙を見たり、藤沢さんの原案を操ったりして十五分、時には三十分近い無言が続く」とあった。

三十分とは恐れ入るが、あの頃の体力と気力はなんとも懐かしい。

かくして、幾たびかの沈黙戦の果てに、懸案のアバンはドラマの王道を貫かんと使用禁止になる。けれどんを捨てて、メインタイトルとキャストスタッフの紹介から、物語の幕が開く。

でも、ちよつと寂しい。薄化粧ならかえって艶が出るかもしれない。

『残日録』のいわれを冒頭に置く。

「日残りテ昏ルルニ未ダ遠シ」と文字が浮かび、仲代さんが洪い声で詠む、三枝成彰さんのテーマ曲とともにタイトル表示が始まる。

タイトル文字は独特のかすれた筆文字書体の渡辺裕英さんが書いた。ユーエ伊さんの筆文字タイトルを楽しみに待つファンも多かったのだ。

メインタイトルの話をしたい。

原作は「三屋清左衛門残日録」。漢字が九文字で、新聞のラテ欄に置くと、かなり鬱陶しく感じる。お客様に目を背けられたらおしまいだ。試みに「三屋」を

省くと、七文字で収まりがいい。

93年正月明け、タイトルを「清左衛門残日録」にしたいと、藤沢さんにおそるおそる手紙を書いた。手紙はペラで二枚程度だが、どう書くかで二晩ほど半徹夜で呻吟する。今は手紙もパソコンで書くが、当時はワープロと手書きとが二対二の比率だった。ワープロでは失礼だからと、二百字詰め原稿用紙に、万年筆で書いた。文章よりも字体に気を遣う。愚かにも、文体では叶いっこないから、見ただけでも味のある字を書こうと見栄を張る。弘法も筆を選んで、万年筆を取っ替えひっ替え、インク壺まであれこれ変えて、ようやく書き終わって気づけば、NHKの原稿用紙を一冊五十枚まるまる使い切っていた。

贅沢な浪費だが、菅野という制作者を藤沢さんに知って貰うためには欠かせない浪費であつたようだ。必要な無駄が許された時代でもある。

平成5年1月22日の石神井郵便局の消印で、藤沢さんから葉書で返事が来る。「新年早々にお手紙をありがとうございまして。早速ご返事をさし上げるところでしたが、小生暮れの大晦日から風邪で発熱し、咳もひどくて、(略)ご返事を書くこともままなりませんでした。お許し頂きます。おたずねの『三屋』をタイトルから取る件、けつこうと存じます。すつきりしてかえっていいタイトルになりそうですね。ほか脚本化に関してはお任せし、放映をたのしみにいたしております。まずは取りあえず。匆匆」

書き写して、今でも、藤沢さんの

お人柄に背筋がしゃんとしてくる。

「日残りテ……」の出典を藤沢さんにお伺いした時にも、実に丁寧な返事が返ってきた。「それらしい文章や詩をあちこちと探しましたが、締切り仕事の合間なのでなかなか探しあてられず、自前で作ったものです。まだ釈然としない気分が残っているのですが、清左衛門自作の一部とでも考えてもらいましようか。(略)なお、ドラマ化は、私に気兼ねすることは全くありませんから、存分に自由につくってください。取りあえず用件のみ。匆匆」

若輩者の僕に、85年連載時まで遡って「釈然としない」と謙虚に語る藤沢さんに、創作者のありよう、その心構えを学ぶ。決して奢ることなかれ、と。

だが、どうにも若かった。アバンの話に戻る。アバンを無くしたのは奢りという気負いだつた。原作は名作だが地味だから、見たい人に見て貰えればいい、心して作るから、出来れば正座して見て欲しい。この呆れるほどの気負いは、本籍映画の某脚本家に「本来、アバンは脚本家が書くべきものではない、アバンは編集の仕事だ」と教わっていたからだ。アバンは編集で編み出された技法で、脚本では邪道で物欲しげな骨法である、と。いい機会だからと、真つ当にメインタイトルから始めた「清左衛門」のあと、9月放送の「はやぶさ新八御用帖」ではあつさり宗旨替えて、アバンを使う。アバン、メインタイトル、本編、予告編、キャストスタッフのロールタイトルの順になる。以来、僕が制作したドラマで、

メインタイトルで始まる作品は一本も無い。

謙虚さとはほど遠い、節操の無さが恥ずかしい。開き直れば、だからテレビドラマなのかも知れない。

「みそ汁のうまい女は良いのだ。佐伯熊太(財津一郎さん)が嫁の里江(南果歩)を誉める台詞で、「……のだ」は竹山さんの文体である。時代劇を知らない脚本家と制作者は実際、書く段になつて、はたと困ってしまう。二人して時代劇の言葉を知らなつたのだ……。」

(つづく)

放送人の会忘年会

日時・12月15日(土)18時~20時半

場所・un cafe(アンカフェ)

コスモス青山サウス棟B2F (テレビマンユニオン
前の屋外エスカレーターを地下2階へ。青山ブックセンター向い)

会費 5,000円 (当日会場でいただきます)

16時半からの臨時幹事会に引き続いて行きます

【訂正】

前号の新会員紹介「池田正之さんは札幌大学准教授ではなく教授、志津木敬さんの龍谷大学アドバイザーは削除です。」ご迷惑をおかけしました。お詫びします。

予告メール犯とTBSラジオ

武本宏一

このところラジオでは、TBSに話題が多い。

第49回ギャラクシー賞ラジオ部門で、「久米宏・ラジオオなんですけど」が、DJ・パーソナリティー部門で受賞した。と思ったら、先日はテレビニュースで「殺人予告メールの犯人らしき男がTBSラジオに告白メールを送りつけてきました」とか言っている。

一体何のことかと思ったら、TBSで毎月(月)〜(金)夜に放送している「Dig (ディグ)」という番組宛てにメールが送られ、「何人かの人たちが、殺人予告メールを送ったとされ逮捕されているが、真の犯人は実はこの私です」

その証拠に、と、いくつもの殺人予告メールが添付されていて、それが紛れもなく未公開の脅迫のメールと全文一致。となると、このメールの投稿者こそ真犯人にほぼまちがいない、と大騒ぎになったものだ。

何でまた殺人予告オタクがわざわざTBSラジオを選んで告白したのだろう、と一寸不思議な気がするが、つまりはそれほど多くのリスナーがTBSを聴いている、という事実の証左なのかも知れない。

というのもTBSラジオは、この10年間約60回もの聴取率調査で、ただの1回も他局に首位を明け渡すことなく、

60連勝を重ねている。ラジオの双葉山なのだ。

悪い奴の一人や二人、TBSのヘビリスナーであつても、少しも驚くに当たらない。

さて、10月もまたむし暑さの残るある日、この私にも一瞬ギョツと胸がしめつけられるような、脅迫メールならぬ、挨拶状が一通届けられた。

差出人は、株式会社TBSプロネックスとある。

聞いたこともない社名に何事ならんと封を切ってみると、

「この10月に、株式会社テレコム・サウンズと株式会社ティー・イー・シーは合併し、TBSの100%出資による新会社TBSプロネックスとして新たに出發します」とある。

びっくりである。実は筆者は、そのテレコム・サウンズを誕生から約四半世紀にわたって手塩にかけて育て上げた元経営者。その古巣の名が、永遠に消えてしまう、ということだ。

一つの時代が幕を閉じたのか、なんてつい大げさなつぶやきも洩れてしまったが、実はほっとしたこともある。

合併のお相手が、小生がTBSラジオ時代に私淑していた白井明さんの創設になる、実力派プロダクションのティー・イー・シーであること。「永六輔の誰かどこかで」の制作やTBS954

による中継など手がけている。実は、かの殺人予告犯も聴取しているらしいが、「Dig」もこの社の手で制

作されている番組だ。総勢110人にも達する社員をかかえて、経営も大変だろうが、60連勝とは言えやや金属疲労もほの見えるTBSラジオに、文字通り新鮮なネクストをプロデュースをする集団になってほしいものだ。

文化放送のオウム事件

田中秋夫

2012年6月15日、オウム真理教最後の逃亡犯、高橋克也が逮捕された。特別手配犯の菊地直子、平田信など3人の17年におよぶ逃亡生活にピリオドがうたれ、オウムによる一連の事件が一応の決着をみることとなった。

そこで、20年以上前、文化放送がオウムに激しく攻撃された事件を、あらためて記録してみようと思う。

地下鉄サリン事件への序章

1995年3月20日、オウム真理教による大規模無差別テロ「地下鉄サリン事件」が起こり、多くの市民が巻き込まれ犠牲になった。この5年ほど前の、1989年10月に、文化放送がオウム真理教から激しい攻撃を受けるといふ事件があった。当時はまだ「殺人鬼集団」の本性が暴露される前で、オウムによる強引な信者獲得の方法が世間を騒がせていた。

生ワイド「本気とDONDON」

89年10月9日「ニュースの向こうに何が見える」をキャッチフレーズにしたワイド番組「梶原しげるの本気でDONDON」がこの問題を取り上げた。毎

日毎日その日の最もホットなニュースをテーマに、広く深く掘り下げるといふ当時としては画期的な番組で、キャスターは人気絶頂の梶原しげるアナウンサー。聴取率も好調だった。

活字媒体では「サンデー毎日」がシリーズで「オウム問題」を追求していたが、電波媒体ではこのワイド番組が一番早かったように思う。番組ではまず、オウムの強引な信者獲得で子供を奪われた親に電話を繋いでその実態を聞き、さらに「オウム真理教被害対策弁護団」を結成して裁判に訴えていた坂本弁護士にオウムの問題点を聞いた。坂本弁護士は具体的な事例を挙げながら、オウムがいかに反社会的な存在であるかを熱心に訴え、宗教学者の認可取り消しにも言及した。

番組はこの後にオウム側の反論を聞くため麻原彰晃に電話を繋いでいる。麻原は坂本弁護士の問題提起に対し、「信者自身の意志による入信である」「坂本弁護士は信教の自由を脅かす存在」として強烈に反論し、緊迫した空気がなった。この日のコメントーターは坂本弁護士と弁護士仲間の木村晋介弁護士だった。木村弁護士もオウムを強く非難するコメントで締めくくった。

この放送はリスナーに大きな反響を巻き起こし、放送終了後も多くのリスナーから、オウムを非難するFAXや電話が番組宛てに殺到した。

オウムの街宣車が

ところが、放送の翌日から突然、オウムの街宣車が大音量のスピーカーで「偏

向した放送局の文化放送に断固抗議する」と叫びながら、四谷の本社社屋の周辺を周り始めた。局の前に四谷第二小学校があり、周辺に住宅があり、騒音被害で大騒動となった。それが一週間続いた後、今度はどこで調べたのか、番組担当だった岡部弘美ディレクターの横浜の社宅にまで街宣車が現れ、抗議行動をエスカレートさせた。その結果、彼女は自宅に帰ることが出来なくなり、しばらくホテル住まいを余儀なくされる。

社内では「こんな異常事態をなんとか打開しなければ」と編成局の緊急会議を開き、対策を話し合った。その結果、「オウムの要求が何かを聞くということになり、編成担当の私は制作責任者の三本明博（現社長）、番組担当の塚本茂さんの3人で世田谷区赤堤にあったオウムの道場を訪れた。

ああいえば上祐

そこには沢山の信者が白い修行服（サマナ）を着てヨガのような修行に励んでいた。なにやら抹香臭い匂いが漂う中、奥まった一室に通されると、そこに若い男が待ち構えていた。

男は「広報部長の上祐です」と名乗った。「ああいえば上祐」と言われた弁の立つことで有名になった上祐史浩だった。「今回の文化放送の番組は一方的であり、オウムの批判に終始しており、このような偏向報道は絶対に許せない」と上祐は主張。「再度、我々オウム側の意見を放送させる」と強く迫ってきた。

そこで私は「今後の放送で再度反論の機会を設ければ抗議行動を収めるのか」

と質すと「それは約束する」と答えた。

再び「オウム問題特集」

我々は3人はこの話を局に持ち帰って会議を開き、当該番組で再度「オウム問題特集」を放送することにした。

10月23日、今度は番組の冒頭で、麻原彰晃に電話を繋ぎ、一連のオウム批判に対するオウム側の反論を聞くことにした。ただし番組の後半で被害者家族やコメンテーターの木村弁護士の見解・反論を付け加えることでバランスをとった。この時も放送後の聴取者の反響は大きかった。一方、あの激しかったオウムの抗議行動はピタリと収まり、その時は事件が一件落着いたように思えた。

暴走さらにエスカレート

しかし、後日明らかになったことだが、一連の騒動が収まった数日後の10月26日、今度はTBSテレビで放送界全体を揺るがす「オウムビデオ事件」が起こっていた。

その数日後、麻原彰晃は幹部の村井秀夫、早川紀代秀らに対し「坂本弁護士の存在は教団にとって邪魔だ」と「ボア」を命じた。

11月4日、実行犯6人によって坂本弁護士一家3人は殺害されている。その後、オウムは、教団に批判的な人物の殺害を次々に企て、実行していった。そして、国家的テロ「地下鉄サリン事件」へと暴走をエスカレートさせていった。

あの事件から23年、いま考えるとオウムと直接対峙した我々も「ボア」の危険に身をさらしたことになる、何とも複雑な気分になる。

なお、この年、「梶原しげるの本気でDONDON」は、そのジャーナリズム性を高く評価され、放送批評懇談会ギヤラクシー賞と民間放送連盟「生ワイド部門」優秀賞を受賞している。

*右記の一文は文化放送OB会報誌「Q友」より64号より転載したものです。皆様のOB会報で面白い記事がありましたら、「一報ください。」(編集部)

早朝はラジオに限る

目覚めが段々早くなる。年をとった証拠だが、朝っぱらから薄目を開けてテレビをつけてみるのもんだでもあるまい。午前4時前後ならラジオ深夜便で過ごすのが近ごろは人選に連続感がなく録音状態も悪い。などと文句をつけて聞いていると5時の時報。早くも高嶋秀武が営業開始の「あさラジ」(ニッポン放送)。ウチクをまじえた口跡の「やじうま好奇心」「絶滅種辞典」「なりきり川柳」のコーナーが抜群。アシスト新保友映アナの病気降板が気になるが、佐藤優、鎌田實、幻冬舎の見城徹などの日替わりゲストが充実。6・30になるとボケットラジオのボタンを押してTBSは「森本教郎のスタンバイ」へ。「朝刊読みくらべ」を筆頭に耳で聞く朝刊をモットーにしたエディターシップが光る構成。8時になれば荒川洋治、月尾嘉男ら日替わりゲストがこころでも人気だ。落ち着きのないテレビのコメンテーター群とは大違い。本来なら早朝読書なんだが、老人性鳥目状態にはラジオがよく似合うのだ。(M)

コラム・煙草・タバコ

▼誰かが言った。愛煙家には煙草を吸う人と呑む人との二種類があり、呑むように吸うヤカラは禁煙は出来ないものと▼長い刑期を終え、たとえば「とんぼ」(88年 TBS)の長淵剛だが、ムシヨの門を出るや否や群がる子分が火のついたライターをさした。ゆつくり煙りを呑みこみ、じつと青空を眺め「シヤバはいいなあ」と▼古川柳に「三日目で取られるものを明智ととり」。わずか三日間にしろ、お天下様だ。ちとらの禁煙は三日ももたない。天下の味も紫煙の香りも変わりがあるじゃなし、なのに▼同じく「三日目に坊主は明智がよくわかり」つまり三日天下と三日坊主には共通した気分がないかどうか。「時は雨が下しる五月哉」と、雨が下と天が下をかけ「敵は本能寺にあり」と呑んでかかる戦さだった。煙草好きだつて「たかが禁煙」と初手から呑んでかかったのがマズかった。三日ともたない「されど禁煙」のこわさを知らなかったのだ▼ま、光秀サンさえ挫折するのだ。されば路上禁煙の巷をさ迷い、派遣のヤンキー娘がたむろする給湯室や分煙表示の喫茶店を物色するとしようか。さもなくば最後の替わが書齋にひきこもるか▼とどのつまり書齋という名の今様「座敷牢」で、吸うでも呑むでもない、せめて「煙草をくゆらす」程度の境地に浸れないものかと。わが、今日び、この頃であります。(松)

第34回放送人句会

◇平成24年9月12日(水)◇於：赤坂・

表屋 ◇選者：星野高士

◇出席：伊藤視郎、上村晁蛙、荻野慶人、
豊田まつり、新村もとを、橋本きよし、
林備後、堀川とんこう、松尾馬笑、森治
美、西川阿舟(12名)

◇不在投句：山県ぼん太

◇兼題：夜長、松茸、曼珠沙華、照明

【星野高士特選】

地の底に朱の池ありや曼珠沙華 きよし
地芝居の照明消えて拍手鳴る 治美
潮騒や夜長の床の朝眠り きよし
デカンショの里の居酒屋土瓶蒸し もとを

照明を控へ目に撮る風の盆 備後
入海と外海を分け曼珠沙華 きよし
曼珠沙華棚田の畦をのぼりつめ 視郎
村を去ることば短く曼珠沙華 ぼん太

【星野高士選】
爽やかに退団の娘へライトの輪

教へ子の心の集ふ小松茸 ぼん太
青空に届く勢ひの曼珠沙華 晁蛙
いしづきの欠片が少し松茸飯 もとを
ゴルフボール消えたる先の曼珠沙華 阿舟

曼珠沙華声なき声の続きをり 治美
照明のがつんと入る秋気かな まつり
球場の照明落ちてより夜長 晁蛙
追伸を書き直したる夜長かな とんこう
老練の監督に待す夜長かな 備後
野に燃えてあの世この世の曼珠沙華

とんこう

海峡のむかう明るき秋灯 まつり
ライトマン月の出処を定めけりもとを
照明に浮かべてみたし秋の声 治美
雨音が谷に落ち行く夜長かな きよし

松茸は網棚にあり落着かず 慶人
長き夜の不倫ドラマと女房と 視郎
らしきもの掴み当てたる土瓶蒸 ぼん太
城壁に暮れ残りたる彼岸花 晁蛙
この先は深山の浄土曼珠沙華 とんこう

電気屋が照明係り村祭 視郎
敗戦の焦土に群れし曼珠沙華 晁蛙
大詰め舞台に咲かず曼珠沙華 治美
介護にと妻は父母がり夜ぞ長き 阿舟

貨車きしみ鉄橋渡る曼珠沙華 きよし
夜長とて語り尽くせぬこともあり 治美
将門の塚に人なく曼珠沙華 晁蛙
ロケ照明落せばそこに虫時雨 とんこう

【会員互選】
松茸を一キロ買ひて爺と食ふ 備後
多摩堤二十歩毎に曼珠沙華 阿舟
捨子花追而みどりの葉叢立つ まつり
ふるさとを浄土に見せて曼珠沙華 備後
歌麿をパソコンで見る夜長かな 晁蛙
長き夜の客一人無き屋台かな もとを

曼珠沙華色赤きほど毒強く 視郎
しげしげと松茸を見る人の輪に ぼん太
沙汰なきを無事と思へぬ夜長かな 慶人
死は生に紛れて見えず曼珠沙華 ぼん太
溶明も溶暗もなき盆芝居 備後
男ひとり夜長の顔と化して飲む ぼん太
チェロの音時に躡く夜長かな もとを

編物の目数の合はぬ夜長かな もとを
松茸のあるやなぎやの土瓶蒸 馬笑
箱買ひの松茸まづは写すなり 治美
修羅場へとライト一転冷じき ぼん太

【選者吟】

人声をなほ遠くして曼珠沙華 高士
一箸の松茸飯に夜充つる
照明も少し秋色帯びてあし
照明を落とし夜長のリハーサル
長き夜のいつもの椅子に深く座す
曼珠沙華ばかり落日ばかりなり
何も考えぬ夜長となりけり

◇平成24年11月7日(水)◇於：表屋
◇伊藤視郎、荻野慶人、中島文博、新村
もとを、橋本きよし、林備後、松尾馬笑、
森治美、西川阿舟(9人)

第35回放送人句会

◇兼題：立冬、鷹、冬菜、子役
◇不在投句：豊田まつり、山県ぼん太
◇兼題：立冬、鷹、冬菜、子役

立冬や長旅終へて猫帰る 丈博
鷹のいる高層ビルに夕陽かな 視郎
冬菜干すぐるりと高い山ばかり ぼん太
売れつの子役疎まし毛蟹喰ふ 丈博
今朝の冬黙し迎へる庭ありて 治美
冬立ちぬ老いの難儀や腕を組み 馬笑
国宝の大鐘をつき冬に入る 視郎
一湾に影横切らせ鷹渡る もとを
喜寿祝冬菜の甘く酒苦く 丈博

*
祖霊呼ぶいたこの声や鷹疾し きよし
大人びし子役のこぼす咳一つ ぼん太
除染なほ遅々と一村冬に入る ぼん太

赤坂に空家一軒冬に入る 備後
冬菜あり酒一合の天下かな 馬笑
冬の月女優然たる子役かな 治美
子役来て現場なごみし冬の朝 治美
人は人鷹は鷹にて山里は ぼん太
急降下我を見据多し鷹一羽 治美
消え物の風呂吹うましと喰ふ子役 阿舟
寂しさは冬菜のみどり峡の道 きよし
洗ひ桶冬菜泳がせ夕仕度 治美
一瞬を鷹がかすめた日影かな 治美
子役等や短き句を狂ひ咲き まつり
鳴き龍の声の朗らや冬に入る 備後
独り居の炊事洗濯冬に入る 阿舟
涸沢の一碧天の鷹飢える 視郎
灯油屋の声弾むなり今朝の冬 視郎
視界から消えない虹と鷹一つ きよし
立冬や浅草よりの帰路三つ まつり
面一本決めていきなり立冬す ぼん太
とろろ汁信濃に帰る人の声 きよし
渦を見て鷹柱見る鳴門かな 阿舟
顔見世や子役一枚名を連らね ぼん太
湯治場の朝市にゐる冬菜買ふ 備後
立冬のホームをおほふ靴の音 治美
墓古りて母の命日冬菜嘔む 丈博
一点の雲なき日和今朝の冬 阿舟
塩で揉み冬菜のみどり戻しけり もとを
立冬やおバマ勝利のラジオ聴き 馬笑
路地裏に中華料理の冬菜畑 視郎
南方を凝視しつつも檻の鷹 もとを

次回放送人句会 ◇平成25年1月9日
◇於：表屋 ◇兼題：歌留多、冬牡丹、
年男、新年会◆特別選者：星野高士氏

- 【あ】青木裕子 赤井朱美 秋田完 秋山豊寛 雨宮望 新井和子 【い】池田正之 石井彰 石井清司 石井ふく子 石高健次 石橋冠 磯野恭子 磯村健二 市岡康子 市村元 一色伸夫 伊藤雅浩 井上良介 今井義典 岩澤敏 【う】上村忠 碓井広義 臼杵敬子 歌田勝彦 宇野昭 【え】江口展之 遠藤利男 遠藤ふき子 遠藤雅充 【お】大蔵雄之助 太田敬雄 大西康司 大西文一郎 大原れいこ 大山勝美 大類啓 大脇明 岡弘道 岡田晋吉 緒方陽一 岡村黎明 小河原正巳 沖野暁 荻野慶人 小田久栄門 織田晃之祐 【か】加賀美幸子 各務孝 片岡敬司 勝部領樹 葛城哲郎 加藤滋紀 加藤迪 加藤義人 金沢敏子 金子登起世 兼歳正英 金平茂紀 加納孝夫 鎌内啓子 上安平冽子 鴨下信一 川口健一 川口幹夫 河村正一 【き】岸田功 北川泰三 北川信 北出晃 北村美憲 北村充史 木村成忠 【く】楠美昌 工藤英博 久保志穂 隈部紀生 【こ】小池勝次郎 河野尚行 児玉久男 後藤和晃 小南武朗 近藤晋 今野勉 【さ】斉藤伸久 斉藤秀夫 斎明寺以玖子 酒井美樹男 寒河江正 坂元良江 桜井均 佐々木彰 佐々木欽三 佐藤年 澤田隆治 沢田隆三 【し】重延浩 重村一 静永純一 志津木敬 嶋田親一 清水満 下崎寛 下重暁子 城菊子 白井博 【す】菅野高至 杉澤陽太郎 杉田成道 鈴木嘉一 鈴木昭典 鈴木克明 鈴木典之 鈴木道明 須磨章 【せ】せんぼんよしこ 【そ】曾根英二 【た】高島秀之 武本宏一 田澤正稔 田中昭男 田中秋夫 田中直人 田中則広 田原英二 田原茂行 【ち】千葉勉 【つ】辻本昌平 露木茂 鶴橋康夫 【と】土居原作郎 堂本暁子 戸田佳太 外崎宏司 豊田由紀子 豊原隆太郎 【な】中崎清栄 中島僚 中田美知子 永田浩三 長沼士朗 永野敏一 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村耕治 中村敏夫 中村美美子 中山和記 難波秀哉 【に】新村もとを 西ヶ谷秀夫 西川章 二宮文彦 丹羽美之 【の】信井文夫 【は】橋本潔 林健嗣 林裕史 原由美子 原田令嗣 【ふ】深町幸男 藤井チズ子 藤田晋也 藤久ミネ 【ほ】星田良子 堀川とんこう 【ま】前川英樹 松尾羊一 松平定知 松前洋一 松本明 松本修 薫りんたろう 【み】三上義智 水上毅 水野憲一 三原治 三村景一 三村千鶴 宮川鑛一 三宅恭次 明神正 【む】村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】諸橋毅一 【や】八木康夫 矢島良彰 藪内広之 山県昭彦 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根基世 【よ】横山英治 吉澤保 吉永春子 吉村直樹 【わ】渡辺紘史

志賀信夫さん追悼

松尾羊一

志賀信夫さんが亡くなった(10月29日)。60年代半ば、新宿二丁目に映画やテレビ関係者が利用する「ユニコン」という洋風酒場があった。映画制作集団「創造社」の御大島浩以下、例えば佐藤慶、佐々木守、戸浦六宏などの面々が常連。その夜は大島と喋っていた当時まだ新進放送評論家だった志賀さんの頭に突然、ビールを浴びせたヤツがいた。当然予想される修羅場だが、志賀さん、少しも騒がずビシヨビシヨになりながら話を続ける…。饒舌で一見軽薄そうな男のもう一つの顔を見たような気がした。佐藤賀三夫、青木貞伸、松田浩といった新聞系に伍す売れっ子評論家だったが、唯一在野のフリー評論家だった。志賀さんの業績を大きく3つ挙げれば、晩年の「映像の先駆者125人」「テレビ文化を育てた人たち」「テレビ番組事始め」3部作によって雑誌「GALAC」に繋げ、自費出版の「年間テレビベスト番組」でギャラクシー賞のグレードアップを図り、日韓中テレビ制作者フォーラムを立ち上げた世話人の一人だったことである。作品評にとどまらずキー局、地方局の経営人脈にメスを入れ、放送制度に架橋し、テレビの未来像を語れる、いわば放送界の総合プロデューサーであった。「やあ、やあ」とパーティー好きの業界に毎度顔を出したが決して目立ちたがり屋ではなく、しかし自然に会場に輪ができる人柄だった。 合掌

編集後記

▼発行が遅くなつてすみません。日韓中テレビ制作者フォーラム慶州大会の特集をお届けします。沢山の方の寄稿をいただきました。ご協力ありがとうございました。▼韓国、中国の参加者の方のお名前がわからず、間違いのまま、あるいは不明のままになっています。わからないのは勿論ですが、中国の簡体字を日本の漢字にするのも難しい。たとえば趙の字は簡体字では走に×とあります。今回幸いローマ字でZHAOと併記がありましたので、中日辞典をローマ字で検索してやっと確かめることができました▼慶州では松尾バー2代目伊藤バーへの多数のご来場ありがとうございました。バーでは曾根さんに助けていただきました。バーの3代目は曾根さんでしようね▼お酒に夢中でバーの写真を取り損ねました。申しわけない▼フォーラム期間中好天に恵まりましたが、「天高し」という表現は韓国にもあつて「天高馬肥」(チヨンゴバビ)というそうです。このまま俳句に使えませんか?▼慶州土産に「法酒」(ポンチュ)という清酒に似たお酒を河野尚行さんに買っていただき、事務局で松尾さんに慶州の話をお聞かせながら飲みました。「マッコリのほうがいい」との意見もありましたが、2杯目、3杯目になると「なかなかいける」ということになり、全部たいらげました▼他の飲み物はあります。近くにおいでのときはどうぞ事務局へお寄りください。

第1日・11日(木)
開会式、開会公演、夕食会

国立慶州博物館



国宝・聖徳大王神鐘 小学生が触りまくる



館内の展示物



司会



歓迎の挨拶

崔良植 慶州市長



李泰鎮 国史編纂委員会委員長



李廷植 韓国PD連合

参加国からの挨拶



今野勉 日本・放送人の会代表幹事



趙平英 中国電視芸術家協会幹事



お料理はバイキング



乾杯のご発声



趙巍 中国電視芸術家協会幹事



さまざまな御馳走



開会式のショー

第2日・12日(金)
石窟庵の日の出



日の出の方角に海がみえる。左手は石窟庵本堂



石窟庵本尊。釈迦如来・石像

歴史スペシャル・ラングトン博士の歴史追跡



任基淳氏
「ラングトン博士の歴史追跡」P

1973年出土



の下から3番目の玉。
慶州、味鄒王陵から
「人面トンボ玉」は首飾り
番組の主題

シンポジウム「テレビは歴史をどう扱っているか」



李徳一 歴史文化研究所長



塩田純氏 (日本・NHK)



司会 張海朗氏 (韓国)



高希希氏 (北京希世紀映像文化発展有限公司)

「漢楚伝奇」鑑賞と討論



吳江氏 (中国)



会場からの発言者



メイン会場



「ミレニアムパーク」観光



ドキュメンタリーの部屋



席からの発言



芸能番組の部屋



長太維氏 「根の深い木」 P



司会 村上雅通氏



石川綾一氏 「ほこ×たて」 P



ドラマの部屋



公演後、劇場ロビーで出演の俳優たちと



12日(金)夜
ミレニアムパークの
近くに浮く気球



中町綾子氏



前川英樹氏

会場からの発言



仏国寺観光





ドキュメンタリーのまとめ 河野尚行氏 (放送人の会)



芸能のまとめ 宋永錫氏 (韓国・KBS)



ドラマのまとめ 呉江氏 (中国)



田村優介氏 張太維氏 陳歆宇氏
「ほこ×たて」「根の深い木」「私たち結婚しましょう」



伴野智氏、初田典子氏、朱楽賢氏、金在英氏
「津波列島…」 「舌先上の中国」「南極の涙」



参加国代表に贈られた金冠のレプリカ ほんものは慶州市

で発見された新羅の金冠でヒスイの玉が沢山ついている



白承逸氏 賈軼群氏 山鹿達也氏
「鄭大世」「葉が落ちる長安」「鈴木先生」



山鹿達也氏 渡辺孝氏

「日本人は何を考えてきたのか」



初田典子氏



通訳たち 中央が日本語通訳のヨン・ポラさん



韓国からの記念品を受け取った中国・日本代表

趙平英氏 李廷植氏 河野尚行氏